

## 当院におけるHBFテストの フォローアップの結果とADLとの関係

聖マリアンナ医科大学病院リハビリテーション部  
能登真一, 中館美保子, 毛利史子, 斎藤和夫,  
松本順子  
昭和大学医療短期大学  
二木淑子

〈はじめに〉 脳損傷例に対する作業療法を行っていくうえで、高次脳機能障害の予後予測を知ることは重要である。今回我々は、当院で用いている高次脳機能スクリーニングテスト（以下、HBFテスト）のフォローアップを行い、高次脳機能障害の改善度、改善に関わる因子を調べ、ADLとの関連を検討したので報告する。

〈対象〉 発症後1年以上を経過した、在宅脳損傷例26例（脳出血3例、脳梗塞15例、SAH 5例、外傷3例）。内訳は男性17例、女性9例で、平均年齢は57.2±17.0歳であった。後述するように、フォローアップ時HBFテストの得点により、HBF正常、疑い、異常の3群に分類し分析を行った。

〈方法〉 入院時HBFテストの結果はカルテより調べ、フォローアップテストは外来もしくは訪問にて行った。検討項目はそれぞれのHBFテストの得点、退院時およびフォローアップ時のBarthel index（以下、BI）、発症からテスト施行までの経過期間、退院時下肢Brunstromステージ（以下、BS）、発症時年齢である。統計手法は、ノンパラメトリック法を用いた。

〈結果〉 発症からテスト施行までの期間の平均は、入院時が40.2日、フォローアップ時が587.9日であった。HBFテストの得点の平均は、入院時が209.9点、フォローアップ時が222.5点となり改善を認めた。その相関は $r=0.708$ となった。

図は各症例の入院時とフォローアップ時のHBFテストの得点の変化を示したものである。フォローアップ時に240点満点中234点以上の正常域に達していた者は14例、216～233点のHBF疑い域の者は7例、215点以下のHBF異常域の者は5例であった。各群における年齢の平均はそれぞれ49.1歳、64.3歳、69.8歳となり群間差を認めた（ $p<0.05$ ）。しかし退院時下肢BSやBI、テスト施行までの期間では差を認めなかった。正常群14例は、入院時HBFテストの得点が1例を除いて216点以上の疑い域もしくは正常域にあった。異常群5例については、入院時HBFテストの得点が201点以下であり、

重度の半側無視もしくは失語症を伴っていた。

ADLについては、全体としての退院時BIの平均が73.2点、フォローアップ時が88.0点となり自立度で改善を認めた。その相関は $r=0.663$ となった。フォローアップ時のADLは、退院時下肢BSとの相関が $r=0.768$ となり相関関係を認めた他、フォローアップ時HBFテストの項目との相関では、motor impersistence（以下、MI）と $r=0.678$ での相関関係を認めた。入院時のMIとは相関を認めなかった。

〈考察〉 HBF障害の改善について、今回の検討項目の中で関係があったのは年齢因子のみであった。また、1年後に正常域に達するためには、少なくとも入院時のHBFテストで216点以上の疑い域である必要があり、それ以下の得点では、1年後も何らかのHBF障害が残存する可能性があると考えられた。しかし、テストの得点がHBF疑いであっても高齢であると改善しにくく、200点以下の重度の半側無視例や失語症例では異常域に止まると考えられた。

一方、ADLは退院時下肢BSと関連があり、従来より報告されている結果に従うものとなった。ADLとMIとの相関関係を認めたことから、発症1年後もMIが残存するようなHBF障害の重篤な患者はADLが改善しにくく、HBF障害がADLの質を低下させている可能性があると考えられた。今後は、HBF障害を有する患者のより詳細な調査やQOL的観点からの研究が必要である。

〈まとめ〉 在宅脳損傷例26例を対象にHBFテストのフォローアップを実施し、入院時との比較、ADLとの関連を検討した。

1. フォローアップ時HBF正常域であった14例中13例は、入院時HBFテストが216点以上の疑い域もしくは正常域の者であり、その改善には年齢が関与していた。
2. ADLは、退院時下肢BSと関連があり、フォローアップ時HBFテストの項目の中では、MIとの相関を認めた。

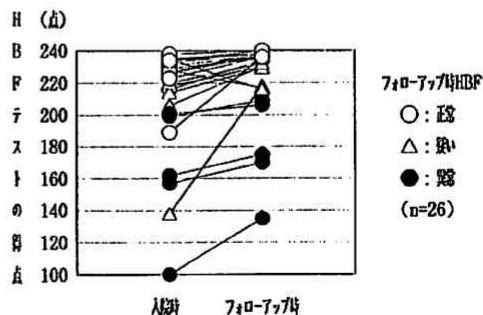


図. HBFテストの得点の変化